

第462図 第三文化層工程別・重量別分布図（1）

ないが、遺物が比較的密集する第8遺物集中部～第10遺物集中部と遺物分布が散漫な第11遺物集中部で構成される。

第8遺物集中部は狭い範囲に遺物が密集する遺物集中部である。接合資料No38, No39が分布するが、この2点は素材の形状や剥離技術が非常によく類似する。サイズが異なる以外は素材利用や剥離技術に共通性が看取できる資料である。

第9遺物集中部は接合資料No40を中心に数点の接合資料が得られているが、構成剥片が比較的広範囲のブロックから出土している。特に第5ブロックから出土しているものが多く、重量3g～5g程度の剥片が多く出土している。第5ブロックは散漫な遺物集中のみで積極的な石器製作の痕跡は看取されないことから、第4ブロックから第5ブロックへ遺物が搬出された可能性が高いと判断される。

第10遺物集中部は接合資料こそ少ないものの、比較的大型の分割縫が出土している。

第5ブロックは第12遺物集中部に散漫な遺物分布が見られるが出土点数は比較的少なく、積極的な石器製作の痕跡は看取されない。本ブロックを主体とする接合資料は抽出されておらず、他ブロックからの搬入品が多いものと推測される。

第6ブロックは頁岩を主体とする大規模なブロックである。7か所の遺物集中部が看取され、直径1.6m程の範囲にドーナツ状に碎片密集部が形成されている。下部には比較的大型の剥片や石核等が密集して出土しているが、分布には偏りが見られる。石核整形段階の資料が第14遺物集中部と第15遺物集中部及び第18遺物集中部～第20遺物集中部に分布する一方、第13遺物集中部と第21遺物集中部は碎片の密集度が低く、剥片や石核のみが多く分布する遺物集中部が形成されている。各遺物集中部の組成に明確な差異が看取され、ブロック形成要因に違いがあることが推測される。

第13遺物集中部は接合資料No43～No45で構成される。いずれも小型の素材を使用するもので、特に接合資料No44とNo45は主軸長5cm程度の剥片を素材とし、素材剥片の末端部側から連続的に剥離を行なうなど、素材の用法に共通性がみられる。一方、打面と作業面の反転については接合資料No44には看取されるが接合資料No45にはみられない。分布状況に大きな差はみられないでの打面と作業面の反転が素材形状により任意に採用される技術であることが理解できる。

第14遺物集中部は遺物分布がやや散漫であるが、特に集中部南側には比較的大型の剥片が出土している。接合資料No46から分厚い板状難素材を荒削した状況が看取できる。

第14遺物集中部については集中部南側にやや重量のある剥片が集中して出土し、集中部北側に碎片を含む比較的軽量の剥片集中部が形成されるなど、遺物集中部内で出土状況に差異が看取される。

第15遺物集中部には接合資料No48～No53, No55, No57が分布する。これらはいずれも構成剥片が径40cm程の範囲に集中して検出されており、一括性の高い資料群であると評価される。また、接合資料No49～No51, No53は第7ブロックを中心とする接合資料No77と石材がよく類似しており、同一母岩の可能性が高い。接合資料No77の一部は第15遺物集中部

の当該部分周辺から出土しており、直接接合はしないものの、分布状況からみても一定の蓋然性がみとめられる。

これらの資料は、石材利用や分布状況では高い一括性が認められる一方で、剥離技術や素材選択には多様性が看取される。ブロック間の石材共有のあり方や同一石材における技術選択の柔軟性が窺える資料である。

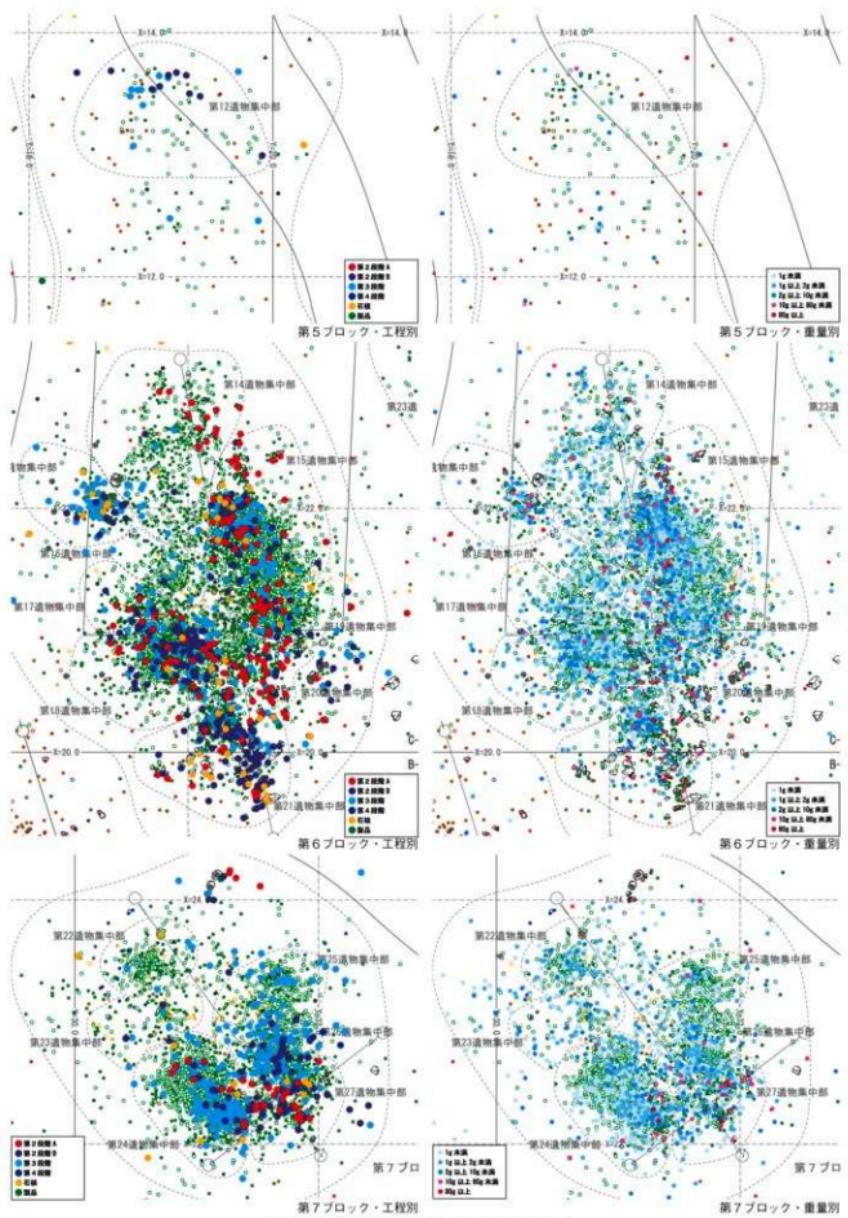
この他、第15遺物集中部では比較的大型の石核や剥片を含む接合資料が散見される。接合資料No55やNo57が該当し、集中部内で大型の素材礫から石核整形を含む工程が行われている可能性がある。

第17遺物集中部と第18遺物集中部では集中部の境界付近に多数の接合資料が分布している。接合資料No58やNo59が代表資料であるが、接合資料No58はブロックAEが第15遺物集中部周辺に散らばって分布する一方でブロックF以降は第18遺物集中部に比較的密集した状態で分布し、さらに石核D1が第7ブロック、剥片H7が第2ブロック第5遺物集中部で出土している。剥片H7は重量が7g程度の中型の剥片で、第6ブロックから搬入されている可能性が高い。

一方、接合資料No59については、概ねブロックAIが第7ブロック第27遺物集中部に分布する一方、ブロックJ以降は剥片L1を除き第17遺物集中部と第18遺物集中部の境界付近に分布する。この資料はブロックFまで板状難を整形し、ブロックGHとブロックIZに分割して各々で剥離が進行する。一方、分布状況はブロックIまでが第7ブロック第27遺物集中部に分布するので、分布状況を剥離順に従って解釈すると、第7ブロック第27遺物集中部で石核整形と分割が行われ、さらにブロックIによりある程度石核整形が施された状態でブロックJZが第6ブロックに搬入消費された可能性が最も高いと判断される。本例もブロック間で石材を共有し、なおかつブロック間の石材受給関係を示す資料である。

第18遺物集中部については、石核整形段階を含む石核接合資料が多数含まれるのも特徴である。接合資料No60やNo61, No62等が該当し、いずれも拳丈の分割縫を素材として石核を回転しながら石核整形と目的的剥片剥離を行なっている。特に接合資料No62は接合資料No77と同一母岩の可能性が高く、注意が必要である。接合資料No62については石核整形段階のブロックAが第21遺物集中部、ブロックBが第15遺物集中部から出土し、概ね目的的剥片剥離段階に該当するブロックC以降が第18遺物集中部から出土している。分布パターンも接合資料No60, No61とは微妙な違いがあり、ブロック内における遺物集中部間の関係や同一集中部内での一括性の評価を慎重に行なうべきである。

第19遺物集中部から第20遺物集中部にかけては、やや大型の角縫もしくは分割縫を素材とする接合資料が分布する。接合資料No65とNo66が該当し、同じ場所に分布する接合資料No77を含めて、いずれも目的的剥片剥離段階で打面と作業面の反転を伴う求心剥離型の剥片剥離技術を採用している点で共通性が認められる。特に接合資料No65とNo66は原縫に近い状態まで復元されており、石核整形段階を含む分布状況の検討が可能である。



第463図 第3文化層工程別・重量別分布図（2）

接合資料No65の分布状況は、主に第19遺物集中部と第20遺物集中部の間で頻繁な移動がみられる。剥離順をみると数枚の単位で移動を繰り返しており、剥離に応じて石核が移動したと考えるより、剥離後に剥片の取扱選択と移動が行われたと解釈する方が適当であろう。第19遺物集中部は碎片が密集する一方で第20遺物集中部は剥片や比較的大型の石核等が比較的散漫に分布する傾向を示しており、遺物分布状況や構成比においては両者は対極的な構造を示すので、接合状況を加味して考えればこれらの遺物集中部はセット関係をなし、どちらかの遺物集中部が剥片剥離後の人の為的な二次的移動により形成された可能性を示すものと考えられる。接合資料No66については、概ね剥離の初期段階に該当するブロックACが第21遺物集中部に、それ以降のブロックDが第19遺物集中部付近に分布する。石核は遺物集中部外からの出土であるが概ね剥離順に沿って遺物が分布する状況が理解できる。

第21遺物集中部には、接合資料No69～No72が分布する。いずれも石核整形段階の剥片を含み、最大径10cm弱の中型の分割難を素材とするものが多い。接合資料No69とNo70は剥離順に応じて遺物集中部が遷移している様子が窺える。特に接合資料No69は剥離の前半段階に該当するブロックACが第21遺物集中部に分布し、それ以降のブロックDが第19遺物集中部に分布する。第13遺物集中部には接合資料No43～No45が分布するのでこれらとの同時性を示すとともに、第21遺物集中部から第13遺物集中部への素材移動が看取される。同様の移動が接合資料No43にも看取され、第13遺物集中部では目的的剥片剥離段階の小型の石核接合資料が主体となることを考えれば、第6ブロック内での石核素材の受給関係が成立する可能性が高い。一方、接合資料No70についても、数枚単位での移動を繰り返しており、分布状況がブロック内の数ヶ所に及ぶことから、剥片剥離後の二次的移動も考慮に入れる必要がある。また接合資料No71については、第21遺物集中部を中心しながら一部の剥片が第13遺物集中部に分布する状況を示す。未接合部分も多いので判断としないが、分布状況から目的的剥片剥離は第21遺物集中部から第13遺物集中部で行われた可能性が高い。いずれにしても第13遺物集中部と第21遺物集中部の密接な関係を示す資料である。接合資料No72は第21遺物集中部を中心とする。目的的剥片剥離段階の剥離も遺物集中部内で行われた可能性が高い。

第21遺物集中部にはこの他に石核整形段階で放棄されたと考えられる資料が多数含まれている。接合資料No73～No76が該当し、これらは本格的な目的的剥片剥離段階に移行する前に放棄されている。遺物集中部形成過程との関連では、集中部内での石核整形剥離が行われた可能性の他に剥離後の二次的移動により選択的に集積された可能性も考慮する必要があり、慎重な検討を要する。

第7ブロックは第6ブロックと同様に頁岩を主体とする遺物集中部で、複数の碎片密集部が形成され、隣接して比較的大型の剥片や石核等の集中部が形成されている。少し離れた位置に形成される第22遺物集中部以外は概ね第24遺物集中部と第25～第27遺物集中部が対をなす構造にあり、接合資料

No77～No79と接合資料No81～No83が各々に対応する。接合資料No80やNo82では一部の剥片が相互に分布する状況も看取され、ブロック内の遺物集中部間関係が理解できる。

接合資料は第22遺物集中部に関連するものは不明であるが、概ね角礫を素材とし、ブロック内で石核整形と目的的剥片剥離を行いうものを数点ずつ組成している。

第24遺物集中部は接合資料No77を中心にNo78.No79等で構成される。接合資料No77は最大径20cm程度の素材を分割し複数の石核素材を獲得している。接合はしないものの、接合資料No78も接合資料No77と同一母岩の可能性が高い。

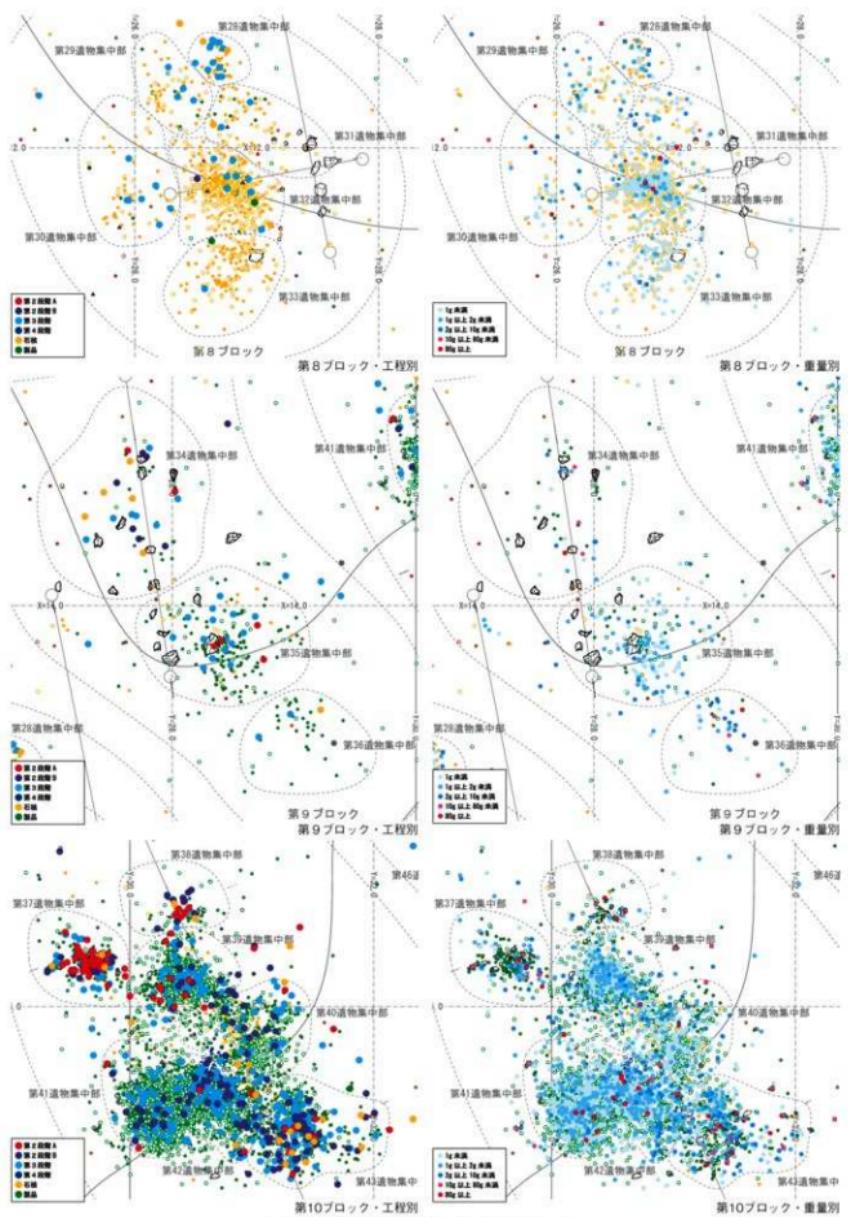
接合資料No77は一部が第6ブロック第15遺物集中部に分布する。第6ブロック内にも同一母岩と目される資料が複数存在するため注意が必要である。接合資料No77については、第6ブロックに分布するブロックSとそれ以外は分割関係にあり、両者の受給関係は明確ではない。両者は相当風化が進んだ節理面で接合しており、母岩レベルで最初から別個体で搬入された可能性も考慮に入れておく必要がある。

出土状況は第24遺物集中部では碎片の集中部が東側に形成されているのにに対し、接合資料はほとんどが少し西側に偏る。接合資料No78でも理解できるように、接合した剥片のはほとんどが集中部内でも碎片密集部とはやや離れた位置から出土している。同様の傾向は接合資料No81やNo82.No83に間連する第25～第27遺物集中部でも看取できる。この場合接合剥片は碎片の密集部とはやや離れた位置に大多数が集中する分布状況を呈しており、特定の剥片が取扱選択されたというよりは、剥片と碎片そのものの分布状況が異なる可能性が示される。石器製作者の作業位置や作業姿勢、剥片剥離時の碎片や剥片の飛散状況等を考慮する必要があるが、碎片と剥片の岐別が丹念に行われている可能性もある。

第8ブロックは玉體II類を主体とするブロックである。玉體II類については搬入石材の可能性が高いと考えられ、径4cm～5cm程度の小型の石核を素材とする石器生産が行われている。碎片が第32遺物集中部に密集し、その周間に比較的散漫な遺物集中部が形成される。接合資料は第32遺物集中部を中心に、複数の遺物集中部から出土する場合が多い。頁岩III類を素材とする小型ナイフ形石器の破断資料である接合資料No88にも注意が必要である。

第9ブロックは活発な石器製作行為の痕跡は希薄であり、ブロック形成過程の検討は困難である。隣接する第10ブロックの接合資料No90やNo92.No93が関連するが、各接合資料を観察する限り剥離の最終段階に近い部分が第9ブロックに搬入されるケースが多く、しかも本格的な目的的剥片剥離段階の石器生産は行われていない。個々の接合資料の理解については後述するが、素材の受給関係からみれば第10ブロックに従属的なブロックと理解される。

第10ブロックでは碎片の集中部が第39～第41遺物集中部に形成されており、その周間に比較的大型の遺物が分布する遺物集中部が形成される。接合資料は接合資料No90やNo91等の板状礫を素材とするもののほか、No92やNo93.No96.No99等の大型礫素材の石核接合資料がある。特に石核整形段階の



第464図 第三文化層工程別・重量別分布図（3）

資料が第37遺物集中部と第38遺物集中部及び第43遺物集中部に集中しており、石器製作行為の内容に偏りが看取される。

第37遺物集中部には板状礫素材の接合資料2点が分布し接合資料No90とNo91が該当する。接合資料No90は構成剥片が広範囲に分布するものの初期段階の剥片が第37遺物集中部周辺に分布するもので、最終段階に近いB14以降の資料が第9ブロックで出土しており、最終的には第9ブロックに石核が移動された上で剥離が継続され、そのまま放棄された可能性が高い。一方、接合資料No91は一部の構成剥片が第39遺物集中部に分布するほか、第11ブロックにも分布がみられる。

接合資料No92は大型の礫を素材とする資料である。石核整形段階の剥片が中心であるが、やや大きめの剥片素材の石核接合資料が含まれる。構成剥片が第38遺物集中部及び第39遺物集中部に分布するほか、第11ブロックや第12ブロックからも出土している。また最終段階に近いブロックJ以降は第9ブロックで出土しており、最終段階は第9ブロックに移動された上で剥離が継続された可能性が高い。概ね剥離順に沿った分布を示しており、ブロック間の石材供給関係を検討可能な資料である。接合資料No93も同様に複数のブロックから構成剥片が出土する資料である。剥離は主に第10ブロックで行われており、第37遺物集中部と第39遺物集中部の間で構成剥片が頻繁に移動している。第39遺物集中部には剥片の密集部が形成されており、両者は対をなす可能性が高い。この他、構成剥片の一部が第11ブロック等に分布する。また最終段階のブロックP以降が第9ブロックで出土しており、ブロックP以降は第9ブロックへ搬出された上で剥離が行われている可能性が高い。

第41～第43遺物集中部は第37遺物集中部とは対極的な位置に形成されており、接合資料No96とNo99、No100等が帰属する。いずれも礫を素材とするもので、接合資料No96とNo99は第41遺物集中部～第43遺物集中部、接合資料No100は第40遺物集中部と第43遺物集中部に跨る形で分布する。剥片集中部に着目すれば対をなす状況を示す遺物集中部を取り込みながら分布しており、第6ブロック等で看取された集中部間関係と同じ構造が第10ブロックにおいても看取される。この他、玉髓II類を素材とする接合資料No102が第40遺物集中部と第43遺物集中部に跨る状態で分布する。この資料は一部の剥片が第8ブロック第28遺物集中部から出土しており、第8ブロックと第10ブロックの関係を示す資料となる。

第11ブロックは第46遺物集中部と第47遺物集中部に剥片を多く含む遺物集中部が形成され、第45遺物集中部と第49遺物集中部及び第50遺物集中部に比較的大型の剥片や石核等が集中する。中でも第49遺物集中部と第50遺物集中部は石核整形段階の剥片が多く分布し、集中部間で遺物組成比が異なる。

接合資料は拳大の角礫を素材とするものが多い。比較的風化の進んだ節理面で覆われる資料が多く、礫状態で剥離が開始された資料が多いと考えられる。接合資料No103は第45遺物集中部と第47遺物集中部を中心に第11ブロック内外の比較的広い範囲に構成剥片が分布している。一方、接合資料No104とNo105は各々第49遺物集中部と第50遺物集中部を中

心に分布し、一部の構成剥片がブロック内に分布する。第49遺物集中部と第50遺物集中部では砂岩の被破破砕繰が集中しており、ブロック形成過程の理解に注意が必要である。

第12ブロックは中央部に大規模な碎片集中部が形成されており、その周間に碎片をあまり含まない遺物集中部が形成されている。第52遺物集中部に礫素材の接合資料No108が分布するほか、第53遺物集中部から第54遺物集中部にかけて板状礫素材の接合資料No113と剥片素材の接合資料No116～No120が、第53遺物集中部と第55遺物集中部に分割礫素材の接合資料No114とNo126～No128及び扁平礫素材の接合資料No125、第55遺物集中部に接合資料No124が分布する。またブロック内の広い範囲に接合資料No115等が分布するほか、玉髓II類を素材とする接合資料No132が第55遺物集中部を中心で分布する。第12ブロックについては遺物分布が非常に密集しているため元々遺物集中部の区分が困難であったが、接合状況のから基本的には碎片集中部と周囲の剥片集中部が関連を持ちながら展開することが確認できる。

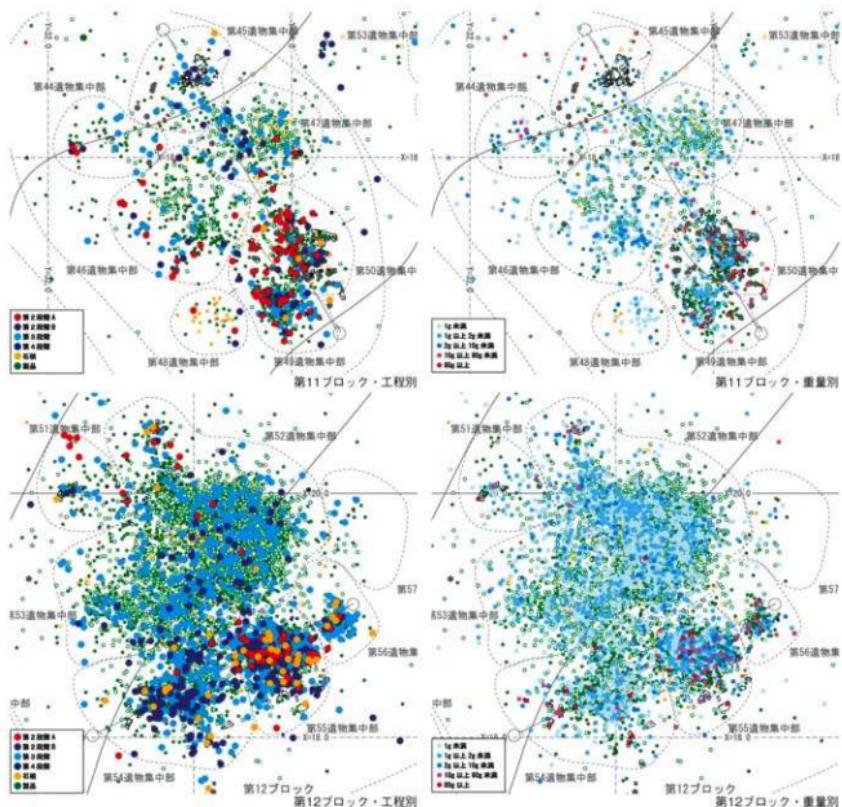
また、各集中部毎に接合資料を観察すると、素材利用と技術選択の組み合わせが各ブロックと比較して最も多様な状況を示す。残されている石核も12ブロック中最も多く、本遺跡の中でも中心的な存在を示すブロックと理解できよう。さらに、第12ブロックには第5ブロック及び第6ブロックと接合関係を持つ資料も含まれており、ブロック間関係を検討する上でも重要である。

### 3 総括

宮ノ上遺跡では、第Ⅲ文化層の接合資料とその出土状況の検討により、ブロック間関係やブロック内の遺物集中部間関係が具体的に明らかになった。特に遺物集中部間関係については、碎片が密集する遺物集中部と比較的大型の剥片や石核が分布する比較的散漫な遺物集中部が相互に隣接して形成され、接合関係等から両者に密接な関連を窺うことができた。

遺物集中部の形成過程には様々なパターンが想定されるものの、碎片等の分布状況が明確に異なる点や比較的大型の剥片と石核が分布する遺物集中部に剥離初期段階の石核整形剥片と最終段階の石核が伴う場合が散見される点、接合資料の分布状況に必ずしも剥離工程に沿わない分布状況が看取される点などから、遺物集中部が石器製作行為だけでなく剥片剥離後の二次的な選択行為等によって形成される場合があることが推定できる。碎片と剥片等の組成比や遺物集中部における分布状況、集中部間の接合資料の分布パターンには複数の類型が看取されるため、現段階で遺物集中部の形成要因の特定については慎重にならざるを得ないが、隣接する複数の遺物集中部が対をなし、その集合体としてブロックが形成されている事例が多く確認できたことは、ブロック形成過程の検討を行なう上で極めて重要である。

宮ノ上遺跡では少なくとも10か所のブロックで活発な石器製作が行われ、そのうち少なくとも5か所のブロックで類似するブロック内構造が看取された。それぞれのブロックで消費された接合資料の観察から、同一の遺物集中部や母岩にお



第465図 第Ⅲ文化層工程別・重量別分布図（4）

いて複数の剥離技術が採用されているケースが多くみられるから。剥片剥離技術には一定の類型を持ちながらも技術の選択は素材の形状に応じて柔軟に行われたことが理解できる。このことは第一義的には各ブロックの石器製作行為や素材条件を反映したものと考えられるが、各技術類型の発現頻度やその組み合わせ、技術選択時の素材条件等にはブロックや遺物集中部間異なる様相が看取される。接合資料を詳細に検討していく必要があるが、これらの背景には石器製作者の個人差が反映されている可能性が高いと推測される。

宮ノ上遺跡では、主に第1, 第2, 第3, 第8, 第9ブロックで比較的小規模な石器製作行為が、第6, 第7, 第10~第12ブロックでは比較的大規模な石器製作行為が看取された。特に後者では各々に石核素材となる母岩が数個ずつ搬入され、各ブロックで石核整形に始まる一連の石器製作行為がほぼ一様に行なわれている。やや時間差を持つ反復的な遺物集中部形成や複数名での同時作業も想定されるため、ブロック内の漸

物集中部間関係を慎重に検討する必要があるものの、現段階では、各ブロックの遺物集中部の組み合わせや接合資料の分布状況、構造や規模の類似性から、各ブロックは1名～2名の石器製作による帰属するものと推定しておきたい。従って、これらの類似する特徴をもつブロックが特定の作業者に帰属し、なおかつこれらのブロックが同時に形成されたとの仮説に立てば、宮ノ上遺跡の石器製作集団は、少なくとも5名～6名の石器製作者を構成する集団であると推定できる。

宮ノ上遺跡は貢原原産地の近傍に位置し、豊富な接合事例から南九州におけるナイフ形石器文化終末期の石材利用技術や遺跡形成過程を具体的に検討することが可能である。搬入石材の利用状況等を含めてさらに検討を行う必要があるが、石器群の分析を通じて石器製作技術のみならず石器製作者とその集団、遊動領域等を検討可能である。本遺跡の出土資料は、当該期の石器文化研究にとって極めて重要な資料であると評価される。（※参考文献は紙幅の都合上割愛した。）

写 真 図 版





宮ノ上崩跡



C-3-5区 東側壁面土層剖面



C-3-5区 東側壁面土層剖面



A-C-5区 東側壁面土層剖面

図版2





C-4区 X層 6号堆集中部検出状況